

# 天然ブリ仔資源保護培養のための 基礎調査実験（抄録）

北沢博夫・村山達朗

日本栽培漁業協会から委託された天然ブリ仔資源保護培養のための基礎調査実験の一環として、本実験の基礎となるモジャコ及びブリ幼魚の分布生態を究明するため下記の調査を実施した。

1. 標識放流調査
2. ブリ稚仔の分布実態調査
3. 魚体測定調査
4. 漁獲統計調査

詳しくは「日本栽培漁業協会研究資料 No.31 1985」に報告されているので、ここでは結果の概要について述べる。

## 結 果 の 概 要

### 1. 標識放流調査

本年度は7月から11月にかけて、モジャコからハマチのブリ当才魚2491尾を4次にわたり放流して調査を行った。1985年6月1日までの再捕率は5.3%である。ブリ当才魚の移動概要は7月が北上、8月が北上ないし滞留、9月が滞留ないし南下、11月が滞留から本格的南下というものである。移動速度は、南下よりも北上が相対的に大きい。7月から11月にかけて北上速度は徐々に小さくなり、南下速度は大きくなる。秋期、大社海域（島根県中部）で行った調査をもとにブリ当才魚の資源特性値を推定したところ、Beverton & Holt法で $Z = 0.117 \sim 0.268$ ,  $F = 0.006 \sim 0.010$ ,  $M = 0.111 \sim 0.258$ , 田中法で $Z = 0.267 \sim 0.435$ ,  $F = 0.016 \sim 0.020$ ,  $M = 0.249 \sim 0.419$ を得た。9月と11月で比較すると両方法とも11月に $Z$ ,  $M$ が大きくなったが、そのほとんどは対象海域外への逸散によるものと推測された。

### 2. ブリ稚仔の分布実態調査

島根県近海におけるブリ稚仔の分布および加入状況を明らかにするために、調査船による試験操業とモジャコ採捕船の標本船調査を実施した。試験操業によるモジャコ分布と表面水温分布とは対応し、初期には17°C台の張り出しとともに分布し、それ以降も分布域は相対的な高温域の張り出しにそって形成されるものと推測した。標本船による調査からみた本年度モジャコ漁況の特徴は、漁期の遅れ、大きな盛漁期を迎えずに終漁したこと、魚体が例年に比べ大型であったことなどである。

### 3. 魚体測定調査

流れ藻から離れた幼ブリの成態と成長を調べるために、島根県下の主要港においてブリの体長測定を行った。5月下旬から7月上旬にかけて流れ藻に付随して加入したモジャコ(3~15cm)は、7月中・下旬15~20cmとなり沿岸に接岸し定置に入網する。それが9月には30cm前後、10月には35cm前後となる。1983年度と本年度を比較すると、9月まではほとんど変わらないが、10月以降は本年の方が3~5cmも魚体が大きかった。

### 4. 漁獲統計調査

昨年度に引き続き、県内主要漁協の水揚帳について整理し、ブリ類の銘柄別の漁獲統計調査を行った。その中で9月から12月までの県下9漁協の日別漁獲量を尾数で求め、秋期におけるブリ当才魚の動態を相互相関分析法により調べた。その結果、南下移動がそれほど強くなく、むしろ滞留期と考えられる9、10月に統計上有意な日数が示されたり、逆に移動が強まる11月に地域間の有意な値が少なかった。このことは、ブリ当才魚が、沿岸を東から西へ移動するという単純なモデルとして想定できるような動態を示さないことを意味していると考えられる。すなわち、ブリ当才魚の中で瀬付き(地付群)と回遊群が存在し、両者が複雑に関係して漁況に現われるとか、ブリ当才魚の動態が連続した沿岸の地先だけに限られず、沿岸から沖合へ、沖合から沿岸へという水平的広がりを持っていること等が考えられる。